秋田の リーダー に 聞く

社会福祉法人　秋田県社会福祉事業団
高清水園
園長

澤石　勉

Tsutomu Sawaishi

1966年、秋田市生まれ。1990年、社会福祉法人秋田県福祉事業団に入職し、複数の施設で勤務。秋田県中央シルバーエリアを経て2016年に高清水園に赴任。2019年4月、同園園長に就任。プライベートではミニバスの指導者を務め、2019年にチームの悲願である全県初出場を達成。現在は退任し、観戦を楽しむ。

高清水園の仕事を「福祉の入り口」にしてほしい

●「暗く閉鎖的なイメージを払拭する

「人材を求めていても、福祉の業界に対して、閉鎖的で暗いイメージを持っている方が多いんです」と実情を話すのは、2019年4月に高清水園の園長に就任した澤石さん。しかし実際はそうではないと言う。「むしろ利用者さんと接していれば、同じことがひとつとしてなく、毎日新しい変化や驚きが連続する。それが楽しく思えてくるのがこの仕事」だと力を込める。

前述のようなマイナスのイメージを払拭し、実際の施設や仕事の姿を伝えようと、澤石さんは就任以降様々な取り組みを行っている。そのなかでも、特に重要視しているのが情報発信だ。情報誌に広告を出し、施設の入り口には施設紹介の映像を流す。ウェブサイトやSNSにも取り組んでいる。

情報発信の必要性を感じるのは、そもそも人が集まらない状況があるからだ。だが、働き始めた人の離職は少ない。同園は充実した福利厚生があり、年次休暇の取得しやすさにも配慮。契約職員と正規職員の同一労働・同一賃金制度に対応した改善策を法人全体で進めている。現在、同園に勤務する職員の年齢層は68歳から20代前半と幅広い。定年退職して、第二の人生として同園で勤務する人もいる。ここにも「高清水園を知ってほしい」と繰り返す理由がある。

●福祉には無限の可能性がある

同園は主に知的に障がいを持った方々が利用し、施設入所支援・生活介護・グループホームの運営など多岐に渡る事業を運営している。その環境で、異業種からの未経験者でもしっかり業務ができるように、充実した研修制度による支援体制を整備している。こうしたことがベースになり、同園の職員は専門的な知識が豊富でスキルも高いことで知られている。

その一方で、澤石さんは課題も感じていた。その課題とは「福祉の仕事は『狭く深く』になりやすいこと」。これは自身が現場で勤務していて感じたものでもあった。そこで澤石さんが就任以降に実行したのが、異業種間連係だった。たとえば秋田公立美術大学との連係では、アートの分野で利用者の個性を引き出そうとしている。「異業種の方々と関係をもつことで、私たちの動きは広がるのではないか。そこで刺激を受けて、職員の意識もより変わると思います」

これらの新しい取り組みのベースには、澤石さんの過去の経験がある。秋田県中央シルバーエリア勤務時代、澤石さんは業務を通じて多く異業種の人と交流した。同世代や若い世代で活躍する人と接して刺激を受けて「事業のフィールドを広げたい」と考えるようになったという。

●高清水園が「福祉の入口」に

「私たちの取り組みの効果がどういう形で表れるのか。それは不透明なところもあります。それでも当園と福祉の仕事を認知してもらえるようにしていきたい」と澤石さん。

同園では実習生を受け入れており、初めて来園する実習生からは「建物が大きく、どういう人が入所しているのかわからない」「どういうふうに接すればいいのかわからない」という声が届く。しかし日を追うごとにコミュニケーションが取れるようになり、5日前後の実習期間が終わる頃には「最初に抱いていた施設のイメージが変わった」と話すという。こうした声も澤石さんを後押しする。

今後も情報発信を続け、多くの人に呼び掛ける。高清水園を「福祉の入口」にする職員が増えれば、利用者に対する支援体制も充実し、理想とする事業に向け異業種間ネットワークが構築できる。「新しい取り組みができる福祉の仕事には、無限の可能性がある。もっと面白い高清水園ができる」と澤石さんは先を見ている。